令和7年度　京都府立井手やまぶき支援学校　　学校経営計画（スクールマネジメントプラン）　＜評価＞

学校経営方針	前年度の成果と課題	本年度の学校経営の重点（短期目標/概ね1年間）
【教育理念】　地域と共に歩む学校 【校　　是】　光輝　地域(まち)を照らせ 【学校教育目標】　みがく　むすぶ　きりひらく 【目指す人間像】 よりよい社会と　幸福な人生を創り出せる人 【経営方針】中期経営方針(開校概ね3年間) ◇教育目標実現のために、開校後の第一期、三年間において、地域関係者・保護者に、教育実践・教育課程を理解いただきながら同時に、教育実践・教育課程づくりへの連携協働を進め、「“井手やまぶき支援学校”がこの地域にあって良かった」という思いをもっていただけるように、あらゆる分野において精励する学校経営を実施する。そのために、学校予算の合理的かつ効果的な執行を実施する。 基盤となる課題・重点課題（アクション７〈セブン〉）を制定する。	三菱みらい育成財団の助成を受け、様々な外部専門家より最先端の知見を学ぶとともに、全国公開研究会を実施し、3年間の成果を発信することができた。「図書ラウンジ」における読書活動の充実と併せて、インクルーシブ教育を踏まえた地域の方々とむすぶ教育活動等の充実により、SMPの保護者評価においては、満足度の高い結果となった。『12年間をつなぐ主体的・対話的で深い学び』をキーワードに『むすびカリキュラム(むすびスタディ・学部混合むすびスタディ)』の研究成果を踏まえ、第2期のスタートの年となる今年度は、インクルーシブ教育の構築を目指した交流及び共同学習の充実や地域の方々とのむすびが深まる教育活動を充実する。また、最終年度となる三菱みらい育成財団の助成と合わせて新規に、中谷財団科学教育振興助成を受ける。教科の視点を改めて捉え、教科学習等における探求的な学びについて考えた指導支援を展開する。 ・みがく授業者サポート会議を100回実施し、授業及び指導スキルの向上を図った。また、人権感覚を磨く「ステージ別研究会」をとおして、教職員の人権意識を高めることができた。 ・学年長やコース長等重層的な組織運営により、チーム学校としての教育力を最大限に発揮することができた。 ・「何気ない軽い言葉の持つ重み」等、本校オリジナルのNOハラスメント標語を掲げ、ハラスメントゼロの職場環境を目指した。 ・子どもたちの才能を開花させる「アートギャラリー（学校美術館）」を開館。アートギャラリー展を開催した。 ・AI等を活用した自己表現や自己理解の推進を図るとともに、視線入力装置やペンタブ等のICT機器を活用した授業づくりを深める。 ・キャリアパスポートを活用し、児童生徒の得意なことや力を発揮したことについて評価できるシステムを作る。	井手やまぶきアクション７(セブン)開校第2期3ヵ年計画のうち1年目 【基盤となる課題】 アクション1　教職員の「学ぶ・働く」を支える環境、教職員の学びが子どもの未来をきりひらく 研究、OJT、外部専門家、働き方改革プロジェクト アクション2　教職員の専門性を生かした連携と協働、地域・家庭・専門家との「むすび」で教育力を高める 学校経理、施設・設備、情報の管理、情報の公開、危機管理、医療的ケア、学校運営協議会（コミュニティースクール）、PTA、YS（やまぶきサポーター）、YB(やまぶきボランティア)、外部専門家、教育後援会等、インクルーシブ教育システムづくり 【重点課題】 アクション3　どのような時代であっても必要な資質･能力の育成 教科指導、授業改善「主体的・対話的で深い学び」(個別最適な学びと協働的な学びの一体的な推進)の追求、教育課程、カリキュラム・マネジメント、（GIGAスクール）ICT　等 むすびカリキュラム、(3年目公開研究会) アクション4　生涯に及ぶ、生きる力の育成のための基礎づくり 読書活動、生涯スポーツ・学習、ISCC(IdeSportsCultureClub/スポーツ・文化を楽しむ日)、交流及び共同学習 アクション5　大人に向けた健やかなからだ、豊かな心の育成 保健指導、安全教育、性教育、主権者教育、生徒指導、教育相談、特別活動、いじめ　等 アクション6　自立と社会参加を実現し、幸福な人生とよりよい社会づくりを目指す力の育成、高等部コース制確立 進路指導、キャリア発達、　等 アクション7　早期支援重視し、切れ目なくつなげる地域支援推進、地域関係者・保護者との連携と協働 井手やまぶき相談・支援センターのみならず全校による地域支援

	評価領域	重点目標	具体的方策/目標値	評価 部門	評価 総合	成果と課題
アクション1	教職員の「学ぶ・働く」を支える環境、教職員の学びが子どもの未来をきりひらく	【研究】 ・全校研究主題の実践研究推進 ・読書活動の推進及び広報活動	①「むすびスタディ」の成果を「交流及び共同学習」に活かすとともに、子ども同士が「知り合う」から「むすぶ」に発展するための必要なキーワードの抽出 ②読書活動をとおした子どもたちの学びの姿や変容の事例研究（各学部2事例）及びによる府内の特別支援学校の読書活動牽引校としての自覚をもった図書ラウンジの活用についての情報発信	○	○	①学部混合むすびスタディでは、「むすびポイント10」を活用した振り返りを通して、学習を“探究”へと深化させるための確かな土台を築くことができた。 ②読書活動スキルアップ研修を実施し、事例について専修大学教授の野口武悟氏より専門的な助言をいただき、府内の特別支援学校へ向けて発信した。
		【OJT】 ・教育公務員として府民に信頼される教育活動を基盤とし、児童生徒の規範となる誇りある行動実践に努める。 ・学校組織としての人材育成体制の整備	①体罰や不適切指導、職員間のハラスメントの根絶等、人権意識と社会人・教育公務員としての自覚と行動実践、コンプライアンスの向上につなげる研修や実態調査(7月期)の実施(不適切事象０) ②教育理念・学校教育目標の理解と学校経営目標を意識した教育活動の追求。中間期、総括期にアンケートにて振り返り達成度を確認する。 ③教職員キャリアステージの指標の意識化とステージ別研修の実施 ④専門組織が提供する研修動画等による自己研鑽(ナビゼミ：長への報告システムの構築、NISE 学びラボ、NITS オンライン講座等の受講１人月１回以上) ⑤初任者及び転入教職員・講師対象の校内研修の充実 ⑥教職員ハンドブック、学校施設管理マニュアル、文書マニュアル等の周知	◎		①ハラスメント根絶に向けたアンケートで挙げられたハラスメント該当の事象については、管理職による個別面談を実施し、当該職員に対して具体的な改善を指導した。ハラスメント等相談対応フロー図をもとに、事象に対してはヒアリングをもとに事実の有無を確認し解決に導くとともに、再発防止措置を行った。 ②③中間期および総括期に教職員を対象としたスクールマネージメントプラン（※以下SMP）アンケートを実施し、教職員一人ひとりが「みがく・むすぶ・きりひらく」を指標として掲げた。また、同じステージ毎の教職員とのむすびを深める「ステージ別研修」により教育活動のさらなる充実に向けた意識を高める機会とした。 ④自己研鑽の機会により（ナビゼミ月1回視聴100%）、教職員の専門性向上を図るとともに、多彩な研修を実施することで、個々の教職員が自らの専門性をさらに深化させることができた。 ⑤初任者指導教諭および人権・人材育成研修部の主導により、本校の理念とSMPを基盤とした初任者・転任者向け研修を充実させた。
		【働き方改革プロジェクト】 ・ライフワークバランスを踏まえた安全で魅力ある職場環境の創出 ・愛校精神の基盤となるように清潔で美しい学校環境を築く。	①『やまぶきスマートプロジェクト』に基づく快適な職場環境の整備、リフレッシュの機会の充実、クリアデスク、ペーパレス化、NO残業デーの実施(月2日)、19時退勤２週間(各学期に1回)、月1時間からのリフレッシュ年休の推奨（衛生委員会による広報活動） ②働き方改革は教職員一人一人が自分事と捉え全員で推進。前月時間外勤務45時間以上者（休日出勤含む）の働き方シートの活用による中間時点での管理職との定期面談と業務整理（時間外勤務0） ③会議の所要時間目安45分以内の意識化（衛生委員会による広報活動）	○		①衛生委員会による働き方改革の推進により、NO残業DAYや「18:30退勤2WEEK」を実施。業務開始・終了の予鈴の運用や環境整備を進めることで、「やまぶきスマートプロジェクト」を着実に推進した。経営企画室による定期的な発信を通して、電力の効率的な活用やペーパーレス化の定着を図ることができた。 ②「働き方シート」や管理職面談を通じて働き方改革を着実に推進した。加えて、ヨリソルによるリアルタイムの勤務時間管理が可能となったことで、教職員一人ひとりの働き方への意識が大きく高まり、改革に向けた機運がさらに強化された。 ③校務分掌およびコース・学年長会議において事前の案件整理を徹底したことで、会議時間を概ね45分以内に収めることができた。また、指導者会については隔週開催とするなどの工夫を重ね、会議運営の効率化が進めることができた。
アクション2	教職員の専門性を生かした連携と協働、地域・家庭・専門家との「むすび」で教育力を高める	【チーム学校】 ・質の高い教育活動を支える経営企画機能の充実	①多様な専門性を有するスタッフや外部専門家と教職員が自らの専門性を十分に発揮し、「チーム学校」としての総合力、教育力を最大化できる体制の構築 ②経営企画室と職員室の連携と情報共有による確実な業務遂行（分掌部長との連携）	◎	◎	①医療専門職派遣事業を活用し、年間10回の外部講師による講義を実施。また、三菱みらい育成財団の支援を受けた研修（インクルーシブ教育、読書活動）も行い、専門的な知識と実践力を高める機会となった。 ②経営企画室の発案により、教職員の業務負担軽減を目的とし、来校者管理フォームの導入、諸費・決裁手続きのデータ化など、業務の効率化を図るためのシステムを導入した。
		【学校経理】 【施設設備】	①学校経営計画の具体化に向けた合理的・効果的な予算執行を学校経営会議で予算状況の開示による節減 ②整理整頓されたきれいな教育環境の維持管理に努める。(教室・廊下、 掲示板の整備・活用、 花壇・植込み・農場の美化・道具の管理) ③絵画作品等の計画的展示等、アートギャラリーにおける美術展の開催と外部専門家の招へい ④府立学校体育施設開放事業の実施(年２回)	○		①学校経営会議において、予算の執行状況を共有・確認。教育活動のさらなる充実を図るための、学校運営費の節約と有効な活用について検討を重ねた。また、各種助成について、教育活動の目的や効果を踏まえ、十分な検討を行った上で活用した。 ②④教務部による教室利用のルール徹底を図り、円滑かつ効率的な学習環境の維持に努めた。また、施設管理職員等と連携し、校内の安全点検や衛生管理を徹底し、安心・安全に学べる環境の整備を進めた。（府立学校体育施設開放事業１回実施） ③アートギャラリー（学校美術館）において、美術展を開催。多くの外部来校者に楽しんでいただけるギャラリーとして定着した。
		【情報の管理、情報公開】	①個人情報保護と紛失事故防止、クリアデスクの徹底 ②HP・Instagramによる情報発信の活発化（各学部HP毎日発信） ③新聞社への広報(掲載１回/月)、教育雑誌への情報提供・掲載(２投稿)	◎		①机上を常に整頓することで、機密情報の漏洩防止や業務の効率化につながる意識の向上につながった。個人情報の紛失は0件であった。 ②「特別支援学校を知っていただくこと」「日々の教育活動を発信すること」を目的として毎日HP・Instagramで発信。新聞社の広報に年間23本の記事が掲載された。
		【危機管理】 ･学校安全会議の計画的な運営による安全・安心な安全管理体制の構築 【医療的ケア】	①感染予防・感染拡大防止等対応の徹底 ②地域との災害時相互協力関係（福祉避難所の検討）をPTA防災部との連携による防災活動の推進 ③『普通救命技師認定証』を保有する教職員の表示（認定シール） ④医療的ケア安全委員会を中心とした研修を計画的に行うと共に、医療的ケアに関するヒヤリハット事象及びインシデント・アクシデント情報の周知と事故発生防止の徹底 ⑤個別の緊急対応訓練の実施(各学部3回以上)及びあらゆる危機に対する、早期対応と情報共有（PTA防災部の評価）	◎		①感染症を防ぐためための学校環境を心掛けた。感染拡大の予兆を養護教諭が早急に察知し、教職員及び児童生徒にきめ細かな注意喚起が必要である。 ②③災害時相互協力関係を築くまでには至らなかったが、PTA防災部を中心に、防災グッズの充実を図った。「普通救命技師認定証」の明示はできていないが、消火器訓練、救急救命講習を確実に実施し、非常時に備えた。 ④ヒヤリハット事象及びインシデント・アクシデント情報の校内共有を図り、再発防止を行った。ヒヤリハット事象に関しては、命を守る観点から、障害理解及び医療的ケアに関わる研修を実施するとともに看護師に特化した看護研修も行った。 ⑤個別の緊急対応訓練を実施。訓練中に挙がった課題を共有し、緊急対応の精度が向上した。
		【保護者・地域との連携・協働】 ・地域の中での生涯学習の基盤作りとして、地域と共に歩む学校づくりに向けた推進体制を構築 ・学校運営協議会(コミュニティスクール)、PTA、教育後援会との連携・協働	①学校公開(年５回)来校者(年900名以上)、やまぶき祭来校者(200名以上) ②学校評価保護者アンケートの回収率(９０％以上) ③PTA(YS)、地域ボランティア(YB)による応援組織の構築(年延べ１５０名) ④PTA本部役員会と学年・コース長との協働 ⑤地域住民の参画による豊かな体験的学習の充実(こまちサロン20回以上等) ⑥教育後援会の支援のもと、教育環境の充実	◎		①②③学校公開926名、やまぶき祭362名。保護者向け学校教育アンケート回答率７５％。地域と共に歩む学校として多くの方の参画のもと学校運営を行うことができた。YSやまぶきサポーター230名、YBやまぶきボランティア30名の参加。様々な業務支援をしていただくことと合わせて、本校の教育活動について理解していただく機会となった。 ④⑤PTA本部役員及び学年・コース長との協働については、具体的な取組は実施できなかったため、引き続き模索が必要である。子どもたちの豊かな人生につながる文化に触れる体験ができるこまちサロンについては、26回実施。 ⑥図書ラウンジの蔵書及び、フットサル大会の出場のサポート及び教育活動に必要な教材について充実を図ることができた。
		【インクルーシブ教育システム】 ・インクルーシブ教育の構築を目指した、交流及び共同学習の実施	①井手町の2小学校1中学校との交流活動の進化及び校区地域への発信 ②小学部居住地校交流・交流及び共同学習の実施、く様々な交流形式の定着と「知り合う」ための機会の模索 ③地域貢献活動等地域との多様な取組の実施（新規公共施設２箇所開拓）	○		①4校合同インクルーシブ教育推進研修会及び4校合同教務部長（主任）会議を開催。井手町内小中学校との交流の活性化及び連携を深めた。 ②田辺小学校と交流及び共同学習のパイロットモデルを実施。R8以降継続と他校への拡充を目指す。 ③④地域貢献活動の一環として、新規販売学習（2か所）、清掃活動等を実施した。今後は地域の方々への図書ラウンジ本の貸し出しをスタートさせる。

アクション3	どのような時代であっても必要な資質能力の育成	【教科指導、授業改善、教育課程】 ・主体的・対話的で深い学び(個別最適な学びと協働的な学びの追究)、授業改善 ・教育目標に基づく授業実践と地域資源を活用した授業の実施	①学級担任が行う自立活動の指導の充実と流れ図を使った実態把握から具体的な指導内容の設定（ ②確かな学力の育成に向けて基礎基本的な知識・技能の確実な習得を図る教科別の指導の充実 ③「教科」の学びを明確にした各教科等を合わせた指導の充実と各教科等横断的な視点をもった学習の実施 ④地域資源活用の取組を継続的な実施と地域の方々とのむすびを深める学びの充実	○	○	①自立活動推進担当を中心とした自立活動の指導の充実や外部企業からの助成や教材教具の充実を図った。 ②各教科等を合わせた指導の教科の視点の明確化（明示）による、学習内容の精選と焦点化を行った。 ③「地域」や「社会生活」のテーマに即した教科横断的な視点をもった教科学習の充実及び各教科等を合わせた指導との連動をした。 ④地域とむすぶことを前提とした、地域資源を意図的に活用した学習の工夫を行ったことにより、井手町を題材にした地域社会への興味の高まりが見られた。
		【カリキュラム・マネジメント】 ・継続的・発展的な授業改善の推進 ・重層的・機能的な組織運営と教育指導に向けた組織マネジメント	①学部間・教師間の連携、学びの連続性等、12年間を結ぶ、『むすびカリキュラム』の展開 ②総括・教務部長会議と連携しながら各学部で教育課程を検討し、指導計画の改善に生かす。 ③学年・コース長のリーダーシップのもと、学年及びコース運営を効果的に行う。全校学部経営会議で目的等の共有を行う。 ④副学年・コース長を中心にフォロワーシップや教職員集団の同僚性を高める。 ⑤ペアクラスや学年・コースや自立活動推進担当等の教師集団がつながり、日常的に組織的な指導を行う。	○		①むすびスタディ及び学部混合むすびスタディを継続。12年間をむすぶ授業実践の積み上げにより確実な児童生徒の成長が見られた。 ②総括教務会議の定期開催により、教育活動の基礎となる教育課程や行事等の取組についての検討を重ねた。 ③④組織づくりに関するノウハウを共有・確認し合うことで、各自が「長」としての自覚を一層深めた。組織全体の方向性を共有しながら、より円滑で機動力のある運営体制の構築を目指した。 ⑤自立活動推進担当が外部専門家と連携し、コース主任・学年主任・学級担任それぞれのニーズを丁寧にコーディネートすることで、組織的かつ実効性のある指導体制を確立した。
		【GIGAスクール】 ・ICT機器を利活用し、意思表示の手段や外部との関わりをもつことで、生活や学習に対する意欲及び自己表現力を育む。	①AIを活用した自己表現の拡大と自己理解の推進 ②視線入力装置やペンタブ等を活用した表現方法の拡大 ③デジタルによる製品や作品づくりの経験や地域社会とのつながり	◎		①AI実証研究の導入による、教職員のAI活用の推進を図った。（業務のAI活用） ②大阪医療保健大学藪中教授との連携による視覚アセスメントの充実と医療的ケアのある児童の視線入力装置の活用を行った。 ③タブレット端末を活用した写真コンテストの実施及びデジタル作品に関しては今後模索が必要。
アクション4	生涯に及ぶ、生きる力の育成のための基盤作り	【読書活動の充実】 ・府立特別支援学校の読書活動の牽引校として蔵書整備しつつ、読書活動が定着するように全校プログラムを展開する。	①外部専門家を招き、YS(やまぶきサポーター)、YB(やまぶきボランティア)と協働による図書環境を整備 ②読書月間や読書表彰式等による全校的な読書活動の推進(本の貸出 年５０００冊以上　月１人３冊以上) ③府立図書館や町立図書館の活用及び団体貸し出しの積極導入(600冊) ④図書・新聞を活用した読書活動を組み入れた授業連携(学部５例以上) ⑤読書活動推進委員会による読書活動の充実（読書月間、読み聞かせの会）及び牽引校としての府内発信 ⑥蔵書計画による蔵書数４５００冊(R7年度約３５00冊スタート) ⑦読書バリアフリーを目指した「誰もが読書ができる学校図書館」の実現（LLブックや布の絵本・さわる絵本、マルチメディアDAISY図書、電子書籍等の充実） ⑧企業との連携による分類マークの意味理解を促し、分類マーク等の図書ラウンジマップの作製	◎	◎	①YSやまぶきサポーター（230名）、YBやまぶきボランティア（30名）の参加による図書整備を実施した。 ②③⑥年間貸し出し数8198冊（小学部：4820冊、中学部1854冊、高等部1524冊）、府立図書館等の団体貸出762冊、図書ラウンジ蔵書数4500冊（LLブック33冊）。 ④⑤図書・新聞を活用した授業実践はもちろんのこと、高等部の委員会活動（図書委員会）が活性化した。読書表彰式及び読書活動スキルアップ研修では、牽引校として、本校の図書ラウンジ利用の状況やラウンジの本を活用した授業実践について発信することができた。 ⑦読書活動スキルアップ研修においては、講師を招へいして「学校図書館としての機能」や「読書バリアフリー」について学び、ただ本を読む場所にとどまらず、知性と感性が交差し、探究的な学びや対話を生み出す空間としての機能をさらに高める必要について学んだ。 ⑧図書ラウンジマップについては作成中。分類マークは浸透しつつあり、今後は、児童生徒自身が、図書ラウンジの美しく整えられた環境を大切に思い、自ら進んでその状態を維持しようとする姿勢を高めたい。
		【生涯スポーツ・生涯文化につながる学習の充実】 ・生涯にわたってスポーツ、芸術・文化活動に親しむ意欲や習慣を育てる指導の充実	①CS（学校運営協議会/コミュニティースクール）によるISCC(IdeSportsCultureClub/スポーツ・文化を楽しむ日)を年４回実施(参加者１５０名以上)及び卒業生の参加の機会の提供 ②外部部活指導者による、専門的な指導のもと部活動の計画的な実施 ③府立特別支援学校スポーツ交流会大会等への計画的な参加	◎		①CS（学校運営協議会）主体によるISCCの実施（児童生徒のべ117名・ボランティアのべ28名・卒業生のべ9名）。卒業生も参加対象としたことで、多くの参加が見られ、児童生徒の生涯にわたってスポーツ・文化を楽しむ機会を提供した。 ②③部活動指導者として2名の非常勤講師を雇用。より専門的な視点でスポーツを楽しむ機会を提供した。スポーツ交流会は、参加者は少なかったが、大学生とのダンスコラボにおいて、普段関わりのない方とも、スポーツをとおして関わる機会を得た。
アクション5	大人に向けた健やかな体、豊かな心の育成	【人権尊重の教育の推進】 ・人権を大切にする教育の充実 ・適切な生徒指導と、事象の共有化	①12年間を結んだ主権者教育や人権教育を計画的に行い、社会へつなげる指導を行う。 ②SCやSSWと連携し、指導事象を共有化する関係者会議等を行う。 ③心理面の支援に重点をおく教育相談体制の充実、高等部生（みらいデザインコース）及び希望者のSC面談を行い心の相談相手の認識を高める。 ④人権尊重の観点から、「さんさん」呼びなど児童生徒への丁寧な呼び方や言葉遣いを意識するとともに、校内・職員室・経営企画室内においても、教職員同士が互いを尊重した言葉遣いの徹底を図る。 ⑤アンケートによるいじめの未然防止と体罰・不適切な指導の禁止・根絶	○	◎	①②③12年間をむすぶ教育として、一人一人の児童生徒が包み込まれる感覚をもつことができる人権教育を推進。必要に応じて児童生徒のみならず保護者との相談に関わりSC、SSWとの連携を進めることで、個々に応じた相談体制を構築した。 ④⑤児童生徒一人ひとりを大切にし、名前を「さん」付けで呼ぶことを徹底するなど、丁寧で温かみのある関わりを心がけた。こうした関わりが信頼関係の構築につながった。また、教職員同士も互いを尊重し合いながら連携を深め、同僚性を高めることで、より良い教育環境の実現に向けた協働体制を築いた。
		【安全教育の推進】	①各学部で安全教育を単元化と安全の日を設定し、防災・防犯・安全訓練を実施(月１回以上) ②児童生徒の防災頭巾(家庭準備)100%備える。 ③施設安全／施設・設備利用に関する安全な利用方法の徹底（行方不明・けが等の防止、安全表示） ④通学安全／通学環境の整備（SB 発着体制、送迎車両対応、通学路点検） ⑤避難訓練／外部評価を活用した、より実際に則した訓練の実施	◎		①②安全の日の確実な実施と防炎・防犯、安全等のテーマに沿った発展的な取組を実施。児童生徒については防災頭巾100%保持。 ③施設の危険個所等は施設管理職員により早急に改善を実施。学習環境の利用方法については、指導支援を徹底した。 ④株式会社キャビックと連携し、安心安全なスクールバス運行に努めた。バス乗車のルール等を徹底するともに、バスに関わるトラブルに早急に対応した。また、校内乗り入れ福祉車両についても、安全な校内走行等ルールを徹底した。 ⑤「全員が落ち着いて迅速に行動し、想定された時間内に安全な場所へ避難することができた」と高く評価された。総合防災訓練では多くのYBに支えられ、「あそぼうさい」「防災給食」等充実した取組となった。
		【保健指導、教育相談、特別活動】 ・安全・安心な保健体制の構築	①個に応じた安全でおいしい給食提供とお話絵本（図鑑）とのコラボ給食（毎学期）の実施 ②適切なアレルギー対応を行う為の教職員研修及び校内保健体制の構築 ③安心安全な医療的ケア制度の実施とその体制を構築するための「やまぶき医療的ケアハンドブック」の考案	◎		①給食月間の充実（給食ソングの考案等）を図るとともに、安心安全な給食の提供を行った。（給食保護者満足度100%） ②一富士フードサービスと連携し、アレルギー対応の給食と個々の実態に合わせた形態食の提供を行った。 ③「やまぶき医療的ケアハンドブック」の考案に関わる資料等の収集にとどまった。
アクション6	自立と社会参加を実現し、幸福な人生をよりよい社会づくりを目指す力の育成	【進路指導・支援】 ・希望進路の実現と進路開拓	①高等部卒業後の社会参加を見据えた12年間を通した進路学習及びニーズに応じた保護者支援の充実 ②高等部コース制に連動させた校外実習(職場実習)を積極的に実施と働くことへの意欲を高める学びの模索 ③進路情報の教職員への周知・学習の機会として校内研修等の実施や事業所や実習先へ見学する機会を設ける。	◎	○	①各学部での進路研修会を実施した。保護者のニーズが高い内容を研修会に取り入れることで、保護者が進路への見通しをもつことができた。 ②生徒の実態に応じた実習を実施。実習中の態度、公共交通機関の利用等課題を見出し、社会生活の見通しや働く意欲を高める実習となった。 ③進路情報を職員室入り口に設置。社会生活を営む卒業生のアフターフォローや事業所見学等と、進路について教職員が学ぶ場を設けた。
		【キャリア発達等】 ・児童生徒がライフステージを意識した、学習活動と学部ごとのゴールを明確にしたキャリア教育の推進	①むすびスタディの成果を活かすとともに、社会や人の役に立つ喜びを豊富に体験し、児童生徒の自己肯定感や意欲を育てる一貫性のあるキャリア教育の推進 ②自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返ったりして、自己評価を行うとともに、主体的に学びに向かう力を育み、自己実現につなぐキャリアパスポートの活用（キャリアパスポート表彰：試行） ③中学部・高等部教員による実習先の新規開拓(一人一社以上)	○		①むすびスタディーの成果を活かし、「学部混合むすびスタディ」においてキャリア発達を促す多くの取組を進めることができた。 ②子どもたちの自己肯定感を高められるパスポートとなるキャリアパスポート（通知表）の形式を、さらに見やすく変更した。キャリアパスポートを活用して日々の学習活動を振り返ることで、自分の成長を実感する機会となった。 ③電話による実習先の開拓を実施したが、実習につながったのは数件。今後実習先の開拓については検討が必要である。
アクション7	早期支援を重視し切れ目なく地域支援につなげる推進	【井手やまぶき相談・支援センターのみならず全校による地域支援】	①園や学校との「むすび」をスタートする「なんでも相談会」の実施及び依頼に基づく早期から学びにくい子への支援体制の構築 ②市町教育委員会等との綿密な連携を目指し校区相談支援体制の整備の模索 ③「個別最適化」「インクルーシブ」「高等学校の支援体制の構築」をキーワードにした相談活動及び障害のある児童生徒及びその保護者へのきめ細かな支援 ④校内地域巡回相談員の積極的活用	◎	◎	①巡回相談299件実施。「なんでも相談会」14件により、支援の輪を拡げることに繋がり、早期から学びにくい子どもへの特別支援教育の視点での支援や支援体制の構築につながった。（なんでも相談会より相談支援につながった件数１件）。巡回相談件数が増加傾向にあることを踏まえ、今後は地域支援センターのコーディネーターとしての職務および業務内容を精選しつつ、校区地域における特別支援教育の充実と、インクルーシブ教育の一層の推進に寄与できる体制を強化する。 ②市町教育委員会等との連携により、各種研修会講師として特別支援教育について講義を実施。今後も小中学校との密な連携に関わり、相談体制の整備をコーディネートする必要がある。 ③高等学校の支援に関しては模索が必要であるが、支援を継続するための体制を構築することができた。 ④地域巡回校内相談員15名を積極的に活用し、専門性の向上につなげることができた。

学校関係者評価委員会による評価	【安全教育の推進】児童生徒そして教職員の命を守るための総合防災訓練の実施は非常に評価できる。また、障害のある子どもたちに対して身近に防災を学べる工夫をしている点が素晴らしい。【生涯スポーツ・生涯文化につながる学習の充実】ISCCにおいて、初めて卒業生の参加を実現。生涯にわたって豊かな生活を営むためのスポーツ・文化を支援していきたい。地域と共に歩む学校として、地域とのつながりをさらに充実させた教育活動を期待する。
次年度に向けた改善の方向性	開校第２期２年目となる年度として、「むすぶ」をテーマに、「そばにいるのが当たり前」を合言葉として、インクルーシブ教育のさらなる深化を目指し、井手町内３校及び教職員との創意工夫に満ちた交流及び共同学習を通じて、多様性を尊重し合う学びの場を創出する。これらの実践は、今後の交流及び共同学習のパイロットモデルとしての役割を担い、他校区の小中学校との新たな「むすび」へと広がりを目指す。企業様からの助成によって広がった教育の可能性を、持続的な教育の力へと昇華させるべく、創意と工夫を重ねた教育活動を進める。